

ジャスティス～闇の迷宮～ (JUSTICE ~ DARK LABYRINTH ~)

2004(平成16)年9月21日鑑賞(ホクテンザ)

★★★★



監督・脚本=クリストファー・ハンプトン/出演=アントニオ・バンデラス/エマ・トンプソン/ルーベン・ブラデズ/マリア・カナルス/クノ・ベッカー/レティシア・ドレラ/ジョン・ウッド/クリア・ブルーム/アントン・レッサー (株式会社ファインフィルムズ配給/2003年アメリカ・アルゼンチン・スペイン・イギリス映画/107分)

第3章

スクリーンの彼方に世界が見える

……1970年代、軍事政権下にあったアルゼンチンでは、3万人の市民が「失踪」した。妻の失踪を契機として「権力」と対峙する主人公を描いたこの映画は、2003年の第60回ヴェネチア国際映画祭に『座頭市』(03年)、『21グラム』(03年) などとともに正式出品され、その強烈な政治的メッセージが賛否両論を呼んだ問題作。多くの日本人に、こんな映画をじっくりと観てもらいたいものだが……。

「失踪」という言葉

失踪という言葉は広辞苑では、「行方をくらますこと」。また民法には「失踪宣告」の制度があり、30条1項は「不在者ノ生死カ七年間分明ナラサルトキハ家庭裁判所ハ利害関係人ノ請求ニ因リ失踪ノ宣告ヲ為スコトヲ得」と定めている。そして、ここでいう「失踪」とは、「不在者(従来の住所または居所を去って容易に帰来する見込みのない者——民法25条)の生死不明(生存の証明も死亡の証明もできないこと)の状態が7年不明であることをいう」と解釈されている。

これに対して、北朝鮮による「拉致」被害者問題で言われている「拉致」とは、広辞苑では「むりに連れて行くこと」であり、明らかに強制や暴力を伴うもので、「失踪」とは全く意味が違う概念。

ところが、この映画で軍事政権が言う「失踪」とは、失踪という言葉本来の概念ではない。すなわち、拉致以上の概念。すなわち、軍事政権に批判的で、反対する人々を誘拐、逮捕、監禁したうえ、幽閉、拷問、果ては殺害することまでを意味

していたわけだ。それが1970年代、正確には1976年から1983年まで続いたアルゼンチンの軍事政権下での実態だった。そして、それによって「失踪」した市民の数は、何と3万人。

この映画は、この時代の恐るべき歴史上の事実を生々しく描き、強烈な政治的メッセージを映画ファンに送った感動作！

アルゼンチンの軍事政権とは？

アルゼンチンは、1976年から1983年まで軍事政権が続いた。そして、その時代においては、市民の民主的権利が抑圧されたばかりか、市民の「失踪」が日常茶飯事となり、合計3万人が失踪した。この映画は、そんな時代のアルゼンチンの恥部を赤裸々に描いた問題作。

ここで少しお勉強をしておきたい。ロンドンやブロードウェイでロングラン上演された、有名なミュージカル『エビータ』や、マドンナが主演したアラン・パーカー監督の映画『エビータ』(96年)は日本でも有名で、このエビータことエヴァ・ペロンを通じて、諸外国からは「ファシスト政権」と呼ばれていたアルゼンチンのフアン・ドミンゴ・ペロン大統領も、好意的にその名を世界に知られている。このフアン・ペロンが、アルゼンチンで軍事政権を樹立したのは1943年。そして彼は、1946年に大統領となり、1952年に再選されたが、1955年クーデターで追放された。

しかし、1973年の民政移管後、フアン・ペロンは復権したものの、1974年に死亡し、その3番目の妻イザベルが大統領となった。しかし、イザベルも1976年の軍事クーデターによって解任された。

そして、1976年から1983年まで続いたのが軍事政権の時代。しかし、1982年にアルゼンチンの南東にあるフォークランド諸島をめぐる、イギリスとの間でフォークランド戦争が発生し、1983年軍政から民政へ移管されるに至った。これが、ざっとした第2次世界大戦後60年間のアルゼンチンの歴史だ。

ウォン・カーウァイ **ブエノスアイレスと王家 衛監督**

ブエノスアイレスはアルゼンチンの首都。そしてこのブエノスアイレスは、地

球上ちょうど香港の反対側にあるため、香港から最も遠い位置にある。そのブエノスアイレスを舞台に、香港人監督の王^{ウォン・カーウアイ}家衛監督が、張^{レスリー・チャン}國榮と梁^{トニー・レオン}朝偉の二大俳優を登場させて、その同性愛を描いたショッキングな映画が『ブエノスアイレス（春光乍洩／Happy Together）』（97年）。

この映画の時代は1997年。狭い世界に閉じ込められていた若者たちが、自由奔放に広い世界を求めて飛び立っていく姿をテーマとしたものだが、同時にこの1997年は中国の指導者鄧小平が死亡した年。結局、中国や香港の若者たちは、香港や中国に戻っていくのだろうか……？

そんな不思議な王^{ウォン・カーウアイ}家衛監督映画の中で有効に使われていたのが、頹廢的な雰囲気の中で踊られるプロダンサーによるアルゼンチンタンゴ。そして、張^{レスリー・チャン}國榮と梁^{トニー・レオン}朝偉は、何と男同士でこの妖しげなダンスにも挑戦（？）……。

この映画ではアルゼンチンタンゴは？

このように、ブエノスアイレスを舞台にした映画では、アルゼンチンタンゴはその不可欠の要素となるもの。それがこの映画では……？

失踪した妻セシリア（エマ・トンプソン）を探し求める夫のカルロス（アントニオ・バンデラス）が、あるバーに座っている時、その目の前で1組の男女によって踊られるのが、見事なアルゼンチンタンゴ。

しかし、失踪者の姿が「見えてくる」という不思議な能力を授かったカルロスの目には、その後、壁に写って妖しく踊られるアルゼンチンタンゴの影は、抵抗する妻セシリアを左右から強制的に連行している男たちともみ合う姿として、現れてくる。

このように、セクシーで妖しげ、そして魅力的なアルゼンチンタンゴの踊りも、この映画では何とも悲劇的な要素として……。

ちなみに、王^{ウォン・カーウアイ}家衛監督で思い出したのが、2004年秋に公開される予定の映画『2046』への期待。これは、2004年の第57回カンヌ国際映画祭出品作品で、梁^{トニー・レオン}朝偉、木村拓哉、鞆^{コン・リー}俐、フェイ・ウォン、章^{チャン・ツイイー}子怡、カリーナ・ラウ、チャン・チェン、マギー・チャンらのオールスターが出演する、いかにも王^{ウォン・カーウアイ}家衛監督らしい「不思議」そうな映画で、今から大きく期待しているが……。

軍事政権と民主主義を考える

日本は1945年の敗戦から、アメリカの戦後支配と庇護の下に、驚異的な経済復興を遂げた。また「平和憲法」の下で、戦争や内乱もなく、民主主義は「順順に」育ち、世界有数の経済大国に成長した。このことは、前述した1943年以降のアルゼンチンにおける軍政 VS. 民政のせめぎ合いの歴史を見れば明らかで、いかに日本が、そして日本国民が恵まれた政治情勢の下で過ごしてきたかということがよくわかる。

もっとも、現在の日本の民主主義が本当に「自立したものか」、また「成熟したものか」と考えれば、私には大きな不安がある。民主主義とは、常に学習と闘いの中で根づくものであるはずだが、私には今の日本の「民主主義」は、「観客民主主義」とか「無責任民主主義」と表現しなければならないような、脆弱なものに思えてならない。

戦後59年間、これほど平和に暮らすことができたことは、ある意味で奇跡的なことだと認識し、現在日本や世界で起こっているさまざまな問題にきちんと目を向けて検討し、民主主義のルールに従って、きちんとした政治的選択をやっているかなければ、とんでもないことになるのでは、と思えてならないわけだ。

この映画のテーマは、1976年から1983年の軍事政権下で、不当に抑圧された民主主義的権利をめぐる市民の闘い。民主主義とか政治闘争とかという言葉にトンと縁遠くなっている今時の若者たちに、是非この映画を観て、考えてもらいたいものだ。

バンデラスは映画『エビータ』にも出演

この『ジャスティス』の主人公カルロスを演じたアントニオ・バンデラスは、『マスク・オブ・ゾロ』（98年）、『パリストティック』（02年）、『レジェンド・オブ・メキシコ』（03年）等で大活躍の俳優だが、マドンナが主役となった映画『エビータ』（96年）では、狂言回しのチェ・ゲバラ役で出演し、アルゼンチンの歴史の語り部となっていた。

そんなバンデラスがこの『ジャスティス』では、自分の妻と一人娘を軍事政権

に奪われるという、アルゼンチンの激動の歴史の中に「当事者」として登場し、これと闘い続けるという感動的な役を演じたのも何かの因縁かもしれない。

カルロスとその家族たち

バンデラス演ずるカルロスは、児童劇団の演出家で、特に政治的発言をしている人物ではない。この劇団の主催者で、カルロスのパートナー的な人物はシルビオ（ルーベン・ブラデズ）だが、シルビオはカルロス以上に政治には無関心な男。しかしカルロスの妻のセシリアは、ジャーナリストとして、日々増え続ける失踪者の問題点を告発しようとしていた。

映画の冒頭、そんなセシリアが、いきなり乗りつけた車の中に無理矢理連れ込まれて、拉致、失踪することに……。当然セシリアは、監禁され、政府に対する告発をやめると言うまで拷問、レイプの毎日だ。

何とかこれを救出しようと、一人娘のテレサ（レティシア・ドレラ）や、かつてはシルビオと恋人関係にもあったもう1人の劇団員の親友エズメ（ MARIA・カナルス）とともに奮闘するカルロス。

そんなカルロスは、ある時、失踪者について、あたかも「透視術」のような特殊な能力が授けられたことに気づかざるをえなかった。

失踪者の家族の手を握り、目をつぶってその失踪の状況を聞いていると、なぜかその失踪者の現在の姿が見えてくるというわけだ。

ところが、なぜか自分の妻セシリアの姿だけは、断片的にしか見えない。そんな自分の能力を広く役立たせるため集会を開いたところ、次第にその集会への参加者が増えていった。

しかしそんな中、スパイもその集会に参加することに……。そして、これを暴いたカルロスへの報復として、妻のセシリアのみならず、娘のテレサまでも……。さあ、カルロスはどうするのか……？

あくまで人間的なカルロスの生き方に感動！

カルロスは鉄人ではなく、普通の感情をもった普通の人間。ただ、失踪者に関して、なぜか自分にもわからない特殊な能力が授かっているだけだ。もともとカ

ルロスは、セシリアが失踪者についての調査レポートを発表することについては、現実論として反対していたような立場。

そんなカルロスだったが、セシリアが失踪した後は、軍事政権の中枢であるグスマン将軍（アントン・レッサー）に面会に赴いたり、デモ行進に参加したり、あるいは集会を主催したり、やむなくその行動は変化し、次第にその生き方自体も変わっていった。

しかし、状況は悪化するばかり。何ひとつ好転するものはない。その上、最愛の娘までも拉致され、遂にはカルロスの目には、その殺される姿まで見えてくることに……。

そんなカルロスは、1度はグスマン将軍を射殺しようとしたが、グスマン将軍が自分の娘と抱き合う姿を見ると、これを断念。さらに、1人海の底に潜って自殺しようとしたが、その時、自分が死ねば妻も死ぬという確信が生まれたため、これも断念。その生き方はあくまでストレート。

とにかく耐えに耐えて、妻探しの行動を続けていた。こんなカルロスの一市民としての生き方は、すごく正直で人間的。そして、感動的なものだ。

妻のセシリアは？

一般市民的な感覚の人間カルロスに対して、セシリアは、告発記事発表についてのカルロスとの論争（口ゲンカ？）を見ていても、筋金入りのジャーナリストという感じ。

そんなセシリアだから、どんな拷問を受けても、レイプを続けられても、あくまで強靱な神経を保っている、スーパーレディ。こんなひどい現実を記憶に残して後世に伝えなければ、という使命感はそりゃすごいの。

そんな気持ちで日々の監禁生活を送っているセシリアだから、その牢の中に娘のテレサが送り込まれてきても、なお生きる希望を失わない。こんな強い女性セシリアを、エマ・トンプソンが迫力満点で演じている。

シルビオは実は強い男！

政治に無関心で、政治的発言を一切していなかったシルビオだったが、カルロ

スによるあえて反政府的な演出での芝居の上演を認めてしまったため、軍事政権によって劇場は閉鎖され、シルビオは逮捕されてしまった。顔面を覆面で覆われ、目隠し状態のまま監禁され、恐怖におびえるシルビオ。

小心で政治に無関心なシルビオは、この時、尋問されることには何でもしゃべり、早く「解放」してもらおうという心境だった。何を隠そう、その心境は、私にも痛いほどよくわかる。

ところが、拷問を受ける中、シルビオの心の中は軍事政権の横暴に対する「怒り」の気持で一杯となり、遂に一言も口をきかなくなった。それがシルビオにとって、精一杯の人間としての尊厳の維持だったのだ。しかし、その結果、何とも悲惨なことにシルビオも……。

こんなシルビオは、小心者ではない。本当は心の強い、人間性豊かな立派な男だったのだ！

人間への信頼を暗示する1つの挿話

映画は、冒頭からずっと暗い状況ばかり。そんな中、セシリアを探して歩くカルロスが、一羽の鳥に導かれて入っていったある牧場には、ユダヤ人であるアモス（ジョン・ウッド）と妻のサラ（クレア・ブルーム）の老夫婦、そして舌を切られてしゃべることのできない1人の娘が静かに暮らしていた。この家族は、ナチス・ドイツに迫害を受けたユダヤ人の亡命者。カルロスは、この老夫婦から、ユダヤ人収容所の中での辛い毎日の中、明日に向かって希望をもって生きることの大切さを教えてもらうことができた。

この老夫婦とカルロスとの一晩の会話は、2人の老夫婦の静かな名演技の中で、迫害を受け続ける中での希望、人間への信頼を暗示する、何とも温かい挿話として、大きく心にしみてくるものだ。

エンディングはちょっと残念？

長い拘禁生活の末に、セシリアは女ながらも看守を殺害して遂に逃走。やっと自由の身に……？ 今までの重苦しいストーリー展開から、これでやっと開放され、さてこれからどうなるのだろうと思って観ていると、ストーリーはその後意

外な展開に……。

この映画のテーマは、軍事政権下における民主主義の抑圧と、3万人の失踪者という現実をアピールするところにあるのだから、以上のストーリーで十分その目的を達成できたのかもしれないが、エンディングについては、もうひと工夫してほしかったと私は思うのだが……。

こんないい映画がなぜ1年遅れで1館だけ？

この『ジャスティス』という映画は、大阪ではホクテンザというマイナーな映画館1館だけで上映されたが、それも2003年の第60回ヴェネチア国際映画祭での公開から1年遅れ。『座頭市』(03年)や『21グラム』(03年)は、とうの昔に観てしまっている。

こんないい映画がなぜ？ と思ってしまうが、実は私も、この映画がこんなテーマの問題作だとは、いつも切りとって持っている新聞の映画案内を見てもわからなかった。ハリウッドの大作映画のように、新聞等で宣伝されていないのだから、映画ファンの私ですら知らないのも当然。

私がこれを知ったのは、別の映画を観るためホクテンザに行って、映画館の看板を見た時。なるほどこんな映画なのかと思って、先にパンフレットを買い、これは絶対観なければと思ったもの。

こんないい映画をもっと大々的に宣伝してほしいと思うものの、他方で今の日本社会では、こんな強烈な政治的メッセージを持った映画は、敬遠されるだろうと思うのも正直な気持。

したがってその分、良心的で真面目な映画評論家(?)である私が、詳しく評論して、多くの日本人に興味をもってもらわなければ……。

2004(平成16)年9月22日記